僕は神を知っている

赤井葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕は神を知っている

【Ｎコード】
Ｎ８９８１Ｚ

【作者名】
赤井葵

【あらすじ】
この世界に神を信じている人はどれだけいるだろうか？新庄界という少年は信じていない側の人間だった。だが、ある事件をきっかけに新庄界の中に神が入り込み、神が入り込んだ新庄界は「神の器」として悪魔の討伐をしなければならなくなる。新庄界の平凡な日常は崩れ去り、新たな物語が今、動き出す。

第一話～祈願～（前書き）

こんにちは。赤井葵です。
今回この「僕は神を知っている」が初投稿です。まだまだ未熟で乱文になってしまうこともあると思いますが、どうか温かい目で読んでください。

第一話〜祈願〜

新庄界：ごく普通の高校生。特に目立つものがないことにコンプレックス

を抱いている。

花岡すみれ：色白で肩ぐらいまでの茶髪の女子高生。界と同じクラス。い

ろいろあって界の初めての友達となる。

ヘファイストス：炎と鍛冶の神。

ープロローグー

宗教の信者を除いてこの世界に神や悪魔といった類のモノがいると信じている人はどれくらいいるだろうか。

おそらく、ほとんどの人が信じていないと思うが、誰しも一度は信じてもいない神に祈ったことがあるはずだ。自分ではどうしようもなくなったとき、頼ってしまうのは間違いなく神だ。

僕も頼った。頼るしかなかった。そして、願った。願うしかなかった。必死に願った。僕にはそれしか出来なかった。僕には人一人も助ける力すらなかった。だから願った。「力を貸してくれ」と。

第一話〜祈願〜

僕の名前は新庄界。１５才の高校一年生。いや、正確には入学式がこれからだからまだ高校一年生ではないか。僕はここ新木市でもそこそこの進学校に入学する。志望理由は単純に家から徒歩で行ける距離にあるということだ。とくにこの高校でやりたいことはない。

というより、元々友達も少ないのでやれることも少ない。学校生活は友達なしでも問題はないのだ。（検証済み）

歩いて１０分後、学校の校門が見えてきた。
「それにしても、この学校、私立だとしても綺麗すぎるだろ。名前も聖秀学園とか格好いいし。」
僕は学校に見惚れていた。だから気づかなかった。背後から自転車が猛スピードで突進してきていることに。
「ぐっ！！」
背中に大きな衝撃が走った。僕は見事に前方に飛ばされ、頭から地面に落ちた。
「あー・・・ここで死んでしまうのか・・・できることなら、もう・・少し・・生きて・・・」

「・・・・・ここは？」
目の前には真っ白な天井が広がっていた。どうやら、どこかの部屋のようだ。
「やあ、やっと目が覚めたようだね。」
白衣を纏った白髪のおじさんが部屋の隅に座っていた。
「あのぅ、ここは？」
「見ての通り、病院だよ。君は奇跡的に気絶しただけで、怪我もほとんどしていなかったんだよ。」
「じゃあ、僕、生きてるってことなのか・・・？」
「ははは っ、そういうことだね。最近の若い子は頑丈だよ。」
あれだけ飛ばされて頭から落ちたのに僕はほとんど無傷に近かった。日頃、運動もしていないのに頑丈だとは思えない。一体何が・・・
「とりあえず、今日のところは大丈夫そうだし家に帰っていいよ。また何かあったらここに来なさい。」

「あ、はい、分かりました。ありがとうございました。」
僕は不思議に思いつつも、この病院をあとにしようと病室から出た。
すると病室の前に少女が座っていた。
「今日は自転車で引いてしまってごめんなさい。ほんとに怪我がなくてよかったです。」
どうやら、この子が僕を引いたようだ。
「大丈夫。気にしないで。ところで、名前は？同じ高校の制服だよね？」
「あ、私は華岡すみれっていいます。ちなみに、一年B組です。」
「僕は新庄界。華岡さんよろしく。」
「はい、よろしくお願いします。同じクラスっていうのも奇遇ですね。」
「そうなの？じゃあ、僕も一年B組なんだ。」
「はい。私、引っ越してきたばかりで友達もいないので、こうやって話せる人がクラスにいてよかったです。」
二人で話しているといつの間にか病院の外に出ていた。
「じゃあ、私、こっちなので。また明日。」
「うん、じゃあね。」

もう空はオレンジ色になっていた。住宅地内で遊んでいる子どももみんな家に帰る頃なので、辺りは静まりかえっている。
病院は家の近くにある病院だったらしく、家に着くまで時間はかからなかった。
「ただいま。」
鍵を開けて家に入ると、いつもは仕事でまだ帰ってこないはずの母さんが家にいた。
「あら、おかえりなさい。病院行けなくてごめんね。母さん、今帰ってきたの。」
「別にいいよ。それより、なんでこの時間に居るの？」

「会社が火事になっちゃったの。だから、しばらくは仕事お休み。」
「火事？大変だったね。母さんが無事でよかったよ。」
「あら、ありがと。」
この年になると親にお礼を言われるだけで恥ずかしくなるので、僕はすぐに自分の部屋に向かった。
「はあ、今日はトラブル多いな。」
僕はその時、微かに不安があった。その理由はわからない。だけど体がそう感じるのだ。
「少し寝よう。疲れてるのかもしれない。」
僕はベッドで大の字になって目を瞑った。本当に疲れていたのか、すぐに眠りについた。

「・・・い・・か・・い」
誰かが僕を呼んでいる。
「誰？」
「貴様の願いはなんだ？」
「僕の願い・・・？」
「そうだ」
果たして、この僕に願いなどあるのだろうか。僕に望むものはない。仮に、望むものがあったとしても、僕なんかの願いは叶わない。
「僕に、願いは、ない。」
「そうか。だが、いずれどうしても叶えたい願いが出てくるだろう。」

「・・・なんだ、夢か。」
もうすでに時間は９：００を過ぎていた。
「飯食べ損ねたな・・・」
我が家ではだいたい７：３０から夕食を食べると決まっている。と

は言っても家に居るのは母さんと僕だけだ。親父は海外に出張に行ったまま行方不明になっている。僕は親父がどんな仕事をしているのか知らないので、親父には不信感を抱いていた。
母さんも親父のことをよく知らないらしい。母さん、よく結婚する気になったな。
「適当にカップ麺でも食べるか。」
僕は自分の部屋から出て、一階のリビングに向かおうとした。
「バリンッ！！」
家中にガラスが割れる大きな音が響いた。
「きゃあぁぁぁ！！！」
「！？」
母さんの悲鳴が聞こえた。僕は急いで母さんのいるリビングへ向かった。
「おい・・・なんなんだよ・・これ」
僕がリビングに着いたとき、母さんが浮いていた。いや、持ち上げられていた。3メートルはあり、人型の獣のような黒い化物に。僕は状況が理解出来なかった。それどころか、身体が動かなかった。目の前で母さんが殺されかかっているのに、助けようとすることも出来なかった。
「・・か・・い・・・に・・げ・・・て」
母さんは首を締められている中で僕に言った。母さんは僕を必至に逃がそうとしている。それでも僕の身体は全く動いてくれなかった。化物が母さんの首を締めている手の力を強めていく。
母さんの抗っていた手が動かなくなっていた。
「・・・助けてくれよ・・誰か助けてくれよ・・・なんでもするから・・母さんを助けてくれよ！！」
僕は力の限り叫び、神に願った。

「その願い、叶えてやろう」

夢の中で聞いた声がした。
そして僕の左手には剣が握られていた。それに気付いた時には身体が勝手に動き、化物の背後に回った瞬間、僕の左手の剣が化物を貫き、化物を一瞬で燃やし尽くした。
「か、母さん！！しっかり！！」
僕はまだ理解出来ず混乱していたが、母さんが危ないのは理解出来た。
「界・・なのね・・・逃げなさいって・・言ったのに・・」
母さんはこんな状況でも僕の心配をしていた。
「ごめん、母さん。身体が動かなかったんだ。それに、母さん一人置いて行けないだろ。」
「そう・・・ありが・・と・・・う・・・」
「母さん！？」
母さんはその場で意識を失った。

「まだ意識はないみたいだ。いつ目覚めるか分からない。命に別状はないとも言えない。でも大丈夫。この私が何とかしてみせるよ。」
さっきの白衣を着た白髪のおじさんは、病院のロビーに座っている僕を慰めるように言った。
「私は、日渡だ。これでも一応、医学界では有名な医者だよ。」
「そうだったんですか。」
「だから、私に任せなさい。必ず、君のお母さんは救って見せる。」
僕はその言葉に返事をせずに病院をあとにした。

僕は普通に生きることすら認められていない人間なのかもしれな

い。僕は不幸でないといけないのかもしれない。僕という人間はこの世界で必要とされていない存在なのかもしれない。だったら、いっそいない方が・・・

（それは許さん）

「え・・・夢の中の・・」

（そうだ）

「いったいあんたは誰なんだよ。どこにいるんだよ。」

（私は、神だ。名はヘファイストス。今は貴様の中にいる。）

「神？僕の中にいる？どういうことだよ。」

（貴様、自分で願っただろう。助けてくれ、なんでもするからと。だから、その願いを叶えたのだ。）

「ちょっとまって、じゃあ、なんで僕の中にいるんだよ。」

（貴様がなんでもすると言ったから、神の器になってもらったのだ。

「神の器？」

（そう。神は簡単にはこの世界に降臨することはできない。神が降臨すれば、この世界は神の力に耐えられず、破滅してしまう。そこで神の器が必要になる。神はその器に入ることで、自身の力を抑えることができる。）

「でも、なんで僕なんだよ。」

（神の器は誰でもよいというわけではない。強く願った者が器となる。）

「なんだよそれ・・・」

僕は歩きながら、自分はとんでもないモノに願ってしまったのだと気づいた。僕はこれから、どうすればよいのだろう。とりあえずは家に戻って寝るのが先だ。

（今日は貴様も疲れているだろう。今日のところは休め。明日続きを話そう。）

僕はその言葉を無視した。家に着くとすぐさま自分の部屋に入ってそのまま眠りについた。

第一話～祈願～（後書き）

どうだったでしょうか？
短いと感じた人もいると思います。なるべく期間を空けずに投稿していきたいと思います。これからもよろしくお願いします。

第二話～役割～（前書き）

こんにちは。赤井葵です。
「僕は神を知っている」第二話です。一話の題名が二字だったので二話も二字にしてみました。
これから二字縛りにしようかなぁと思っています。それでは、第二話もお楽しみください。

第二話〜役割〜

第二話〜役割〜

（・・き・・ろ）
誰かが何かを言っている。
「なんだよ。僕は眠いんだ。」
（起きろ！！）
「うわっ！！な、なんだ！？」
（もう、朝だぞ。）
どうやら、自称神が僕を起こしたらしい。ということは、昨日の出来事は夢ではないみたいだ。
（何をぼさっとしている。今日も学校あるだろ。）
「今思ったんだけど、僕、お前と話す時、実際に話さないといけないの？」
（そんなことはない。言いたいことを心の中で言えばよい。）
（なるほどね。）
実は内心、独り言みたいで嫌だなと思っていたが、その心配はしなくていいみたいだ。
母さんがいない今は朝食はちゃんと食べることができない。これは僕が料理できないわけではなく、朝早くに起きられないのが原因である。
「今日はヨーグルトだけでいいや。」
（そんなので大丈夫なのか。）
（僕、少食な方だから。）
さっさと食べ終わり、身支度を始めた。
「これなら、走れば間に合いそうだ。」
全ての準備を終えるのにシャワーを浴びたおかげでいつもより時間がかかった。

「じゃあ、いってきます。」
誰もいない家にそう告げた。

「はあ・・はあ、日頃運動しないとこれだけで疲れるな・・・」
（弱いなあ。）
（うるさいよ。）
神はいちいち口を挟んでいる。今だ自分の心に直接話しかけられるというのに慣れていない。
それにしても入学式に出ていなかった僕はクラスて目立ってしまうだろうか。それだけはなんとしても避けたい。僕は静かに学校生活を送りたいのだ。
（それは難しいだろう。）
（おい、人の心読むなよ。）
いや、もしかして言いたいこと以外も筒抜けなのか？違うと信じたい。

今、僕は教室の前にいる。なかなか教室に入る勇気が出てこない。みんなと一緒に入学式に出ていれば話は別なのだが、初日休むだけで、もはや転入生である。こうしている間に、時間は過ぎていく。
「よし、行くか。」
教室に入った瞬間、みんなの視線は一斉に僕に集まった。きっと今の僕の視聴率１００％だろう。
僕は気にしないように黙って席に座る。やはり新入生の机には名前が書かれたシールが貼られていた。実にありがたい。これがなかったら、「僕の席どこ？」と聞かないといけない。
僕が席に着いた直後に朝礼のチャイムが鳴り、クラスの皆が席に着き始めた。
「おはようございます、新庄くん。」

どうやら、左隣の席は花岡さんらしい。
「おはよう、花岡さん。」
花岡さんは挨拶を済ませると前を向いて先生の話を聞いていたので僕も黙って前を向いた。

「あー・・・疲れた・・・」
（そんなに疲れる内容だったか？勉強なんてほとんどなかったではないか。）
急にヘファイストスが話し始めた。やはり少しは配慮してくれていたのだろう。そうしてもらわないと困るのだが。
（だからだよ。普通に授業やってたら、誰とも話さなくていいだろ？でも、クラスの決め事とかは周りの人と話し合わないといけないじゃないか。）
（花岡とかいうやつとしか話してないではないか。）
（まあ、そうだけど。）
神との会話を終え、僕は食堂に向かった。ここ聖秀学園の食堂のメニューは結構豪華だという噂がある。そうなると確かめたくなるのが人間だ。少し歩くペースを早めた。

食堂はメニューだけでなく、内装まで豪華だった。食堂内にはお茶することができる場所までついていた。これほど豪華な食堂はなかなかないだろう。
「さて、どれにしようか・・・」
品揃えがよすぎるというのも意外と困りものだ。
僕は迷った末、定番のカレーライスを注文した。
「・・・なんだこれは・・」
見た目はごく普通のカレーライスなのだが、味が全然違う。カレーライスを超越したカレーライスみたい感じた。とにかく旨い

「あ、そのカレーライス、美味しいって評判ですよね。」
僕が夢中に食べていると花岡さんが自分のお昼を持って席に座った。
「相席いいですか？」
「うん、全然いいよ。ところで、その、敬語やめてくれないかな？
そういうのあまり好きじゃないんだ。」
「分かった。じゃあ、改めてよれしくね、新庄くん。」
花岡さんは満面の笑みで言った。花岡さんはおとなしい人だと思ったけど、笑顔がとても似合っている。
「どうしたの？早く食べないと昼休み終わっちゃうよ？」
「あ、ぼーっとしてた。」
本当は花岡さんの顔を見ていたんだけど。
僕たちはその後、世間話をして昼休みを終えた。

（午後の授業は一時間だけなんだな。）
（今日は始まったばかりだから特別らしい。）
午後の授業は普通の授業で数学だった。僕は数学が結構好きで得意だったので、苦ではなかった。
（後で話しがある。昨日の続きだ。）
ヘファイストスはいつもより少し低い声で言った。
（分かった。）
僕は最小限の返事だけをした。
僕は下校時刻になるとすぐに帰宅した。正確にはすぐに下校したかったが、花岡さんが「一緒に帰ろう。」と誘ってきたので、断る作業で多少時間を使った。

（で、昨日の続きを話してくれよ。）
僕は学校から少し歩いてから言った。
（そうだな。貴様には神の器としての仕事をしてもらわないといけ

ない。）
（なんだよ。その仕事っていうのは。）
（まあ、簡単に言うと、悪魔の討伐だな。）
（・・・悪い、もう一回言ってくれ。）
聞き間違えだと信じたかった。
（だから、悪魔の討伐だ。）
（それ、本気で言ってるのか？）
聞き間違えではなかった。ヘファイストスは確実に”悪魔の討伐”と言った。
（もちろん本気だ。貴様には神の器としてやってもらう必要がある。これは義務だ。）
（なんでだよ。僕は絶対そんなことしないぞ。）
悪魔の討伐なんて死んでもやりたくなかった。
（貴様には断る権利はない。貴様は私と契約を交わした。貴様の願いを叶える代わりに貴様は私の器になるというな。）
（・・・・・）
何も言えなかった。ヘファイストスの言うことは筋が通っていた。
（それでも断るというのであれば、願いを取り消すしかないな。それはつまり貴様の母親はあそこであの悪魔に殺されていたけとになる。さて、どうする？）
（！？・・・・・分かったよ。）
さすがに、母さんが殺されるのは嫌だった。・・・？まて、今こいつ、悪魔って言った？
（おい、今、あの時家に居たのは悪魔って言ったのか？）
（あれは悪魔だ。下級悪魔だかな。）
（それはつまり、僕は既に悪魔を倒しているのか？）
（そういうことになるな。）
僕は既に悪魔を討伐していた。
（じゃあ、あの時の剣と炎はお前の力？
（そうだ。貴様はあの時には既に神の器だ。）

あの時は混乱していてよく考えられなかったが、今考えると全てこいつの力だと気付いた。
（貴様の仕事は神である私の力を使って悪魔を討伐することだ。悪魔は私が感知できる。貴様がわざわざ探すことはない。）
（俺にお前の力なんて使いこなせないと思うけど。）
普通に考えて神の力なんて使いこなせるはずがない。
（普通の人間は使いこなせない。だが、異常な人間ならどうだ？貴様は神の器になった瞬間から使っていだろう？貴様は異常な人間なのだ。）
ヘファイストスは僕が異常だと言った。これといって特に目立つ特徴も特技もない平凡な僕を異常だと言った。別に褒められてはいないのに何故か少しだけ嬉しかった。
（・・・じゃあ、やれることはやるよ。）
（それでこそ我が器だ。）

この時から僕の神の器としての物語は動き出した。

第二話～役割～（後書き）

第二話どうだったでしょうか？まだ序盤ということもあり、いまいち盛り上がっていませんが、今後戦闘シーンも出てくるので楽しみにしていてください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8981z/

僕は神を知っている

2011年12月28日22時45分発行